



TITLE:

# Tutuba語の歯茎閉鎖音と〔n〕について：音韻論的観点から

AUTHOR(S):

内藤, 真帆

---

CITATION:

内藤, 真帆. Tutuba語の歯茎閉鎖音と〔n〕について：音韻論的観点から  
. Dynamis: ことばと文化 2002, 6: 229-230

ISSUE DATE:

2002-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87675>

RIGHT:

## [研究会報告 7]

Tutuba 語の歯茎閉鎖音と [ʳd] について—音韻論的観点から<sup>1</sup>

内藤 真帆

## 目的

ヴェヌアツ共和国の Tutuba 語 /d/ は、[ʳd] と唯一の先行研究で表記されているが、この先行研究が 1976 年とおよそ 25 年前に出版されていることから、これが今日どのように発音されている音であるのかを考察することにする。この音は通常そり舌であると考えられるが、Tutuba 周辺に /d/ 音を linguol-labial という舌と上唇で調音する言語が存在するため、その可能性を考慮に入れて検証することを本発表の目的とした。

## 仮定

この音の調音位置として、次の 3 つが考えられる

1. linguo-labial
2. retroflex
3. dental

3 の dental は、私が視覚による観察から導いた仮定であり、これは舌が上の歯裏にべったりとくっついていたことに起因する。

## 方法

Tryon の先行研究により、[ʳd] の音が使用されているとされる Tutuba 語の単語をいくつかインフォーマントに発音してもらった。インフォーマントは、Tutuba 島出身の女性である。本発表では、彼女が発音した蟻 /didiu/ という単語を録音したテープ

---

<sup>1</sup>2001 年 12 月発表。

を実際に流し、この [ʳd] という音がどのように発音されていたか、図をまじえて説明した。また、比較の参考として *linguo-labial* の場合と *retroflex* で発音された場合の音を発音した。加えて、顔の断面図を描き、この二つの調音位置を示すと共に、*dental* と考えられる根拠を、顔の断面図を描いて説明した。

## 結果

インフォーマントが発音する際の舌の位置は、上唇には全く接していないが、歯裏にべったりと接していることが観察された。ゆえに、舌先は少々そっている感もあるが、少なくとも *linguo-labial* でないことは明らかになった。仮に [ʳd] 音が *retroflex* であるなら、調音点がより後退した位置であるように思われるが、現段階でこの仮定を消去するには十分な資料がなく、この問題に関しては今後調査を重ねる必要がある。

本論文集に寄稿した原稿の 3.1.1. では、スペクトログラムを用いてこの音の分析を試み、[ʳd] とそれに後続する母音の F2, F1, F2-F1 値が描く曲線を、*linguo-labial* の曲線と比較した結果、この音が *linguo-labial* ではないと実証的に示した。

## 課題

この音の厳密な調音点と共に、音韻論的な観点からバリエーションがあるかを調べる。

## 質疑応答（敬称略）

向山（コメンテーター）： 先行研究の中で [ʳd] がどのような環境で生起するかを調べる必要性があるのではないか。また、先行研究の研究という域をでていないので、さらに広がりのある研究が必要だろう。

三谷先生： もともと存在していたそり舌音が使用されなくなったというような通時的变化はないのだろうか。そり舌音がそもそも存在していたものの、それが *dental* に、というような変化があれば、それらが自由変音として生じることは考えうる。それならば、丁寧に発音されるとき、そり舌である可能性は否定できない。また、どの母音が後続するかも関係するだろう。“蟻”という単語では [ʳ] に [d] が後続していたので、初めは鼻音で発音されており、それがそり舌に変化したという可能性は無いのだろうか。無声音である /t/ についても調べると面白いかもしれない。

内藤： これから通時的な変化も Proto Oceanic と比較しながら調べていきたい。